

2019年1月6日 川越教会

新しい命の中へ

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 3章 3～9、15～20 節

そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。

『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。
谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。
曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、
人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』

そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」

民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

[序] 新年と「新しい命」

新年おめでとうございます。この年最初の主の日をご一緒に迎えることが出来て嬉しく思います。どうぞ今年も宜しくお願い致します。皆様それぞれにとって、この一年が神様の恵みに支えられて歩む一年でありますよう、お祈りしています。

今日は、宣教の題に「**新しい命の中へ**」と付けさせて頂きました。今日の聖書箇所では、「**バプテスマ(洗礼)**」ということが一つの主題になっています。イエス・キリストの先駆者と言ってよい**バプテスマのヨハネ**が登場して、多くの民衆に対してバプテスマを施しています。また、22節では、そのヨハネから**主イエス**もバプテスマをお受けになったと記されています。恐らく **30 才位**の時だったと言われています。ここからイエス様も新しい出発、いわゆる公生涯が始まった訳ですが、年の初めにこの箇所を味わうことは意味があることだと思いました。「**バプテスマ**」は、「**新しい命**」「**新しく生まれる(=新生)**」ということと深く結びついているからです。

[1] バプテスマのヨハネのメッセージとバプテスマ

バプテスマのヨハネが授けていたバプテスマ(洗礼)。これは今私たちが主イエス様を信じて受けるものとは質が違います。3節にあるように、ヨハネがしていたのは、“**罪の赦しを得させるための悔い改めの洗礼**”でした。私たちが受けるバプテスマとは、後でまた触れますが、**主イエス様の十字架と復活にあやかる**、という**聖霊のわざとしてのバプテスマ**です。けれども、このヨハネのバプテスマも、大切な意味を持ちました。まず神様に向かう道、つまり心をまっすぐにする、ということです。

ここで**イザヤ書 40 章**が引用されています。“**主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる…**。”このイザヤの預言は、あのバビロン捕囚の憂き目にあったイスラエルの民が、荒れ野を通して再び祖国に帰る日は近い、だから早くその備えをしなさい、と語られている言葉です。そして、バプテスマのヨハネも預言者として、**まことのメシアが現われる日は近い**のだから、その備えをしなさい、救いに与れるように罪を悔い、赦して頂けるよう、その妨げとなっているものを心から取り除きなさい、と力ある言葉で語ったのです。

ここで「**山と丘はみな低くされる**」という「**山や丘**」は、自分たちが特別選ばれた者であると思う「**傲慢**」のことと言えるでしょう。次の「**曲がった道**」というのは、**不従順な心**のことでしょうか。その後の「**でこぼこの道**」というのも、歩きにくい道ですよね。転んだら怪我をします。**様々な欲望**がごろごろと横たわっている。そのような道を平らかにせよ、と言うのです。

このバプテスマのヨハネのメッセージに多くの人々が心を動かされたのですね。他の福音書を読むと、ヨハネからバプテスマを受けるために、続々とヨルダン川のところまでやって来たと書いています。これは凄いことではないでしょうか。私は、人間は捨てたものじゃない、と思いました。私たちはやはり**霊的な存在**なのだと思えます。人は、「**神様のかたち**」(イマゴ・デイ)として造られているから、やはり心の深いところでは、神様を求める思い、従う思いがあるのだと思えます。

しかし、このバプテスマのヨハネのバプテスマは、意味あるものでありましたが、

限界がありました。これは言うてみれば、「洗い」の儀式なのです。旧約聖書の時代でも様々な「洗いの儀式」はあったようです。詩編 51 編でも「ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください。わたしが清くなるように。わたしを洗ってください、雪よりも白くなるように」とあります。またエゼキエル書 36:25 には、「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる」とあります。このような洗いの儀式は、今日のバプテスマのような一回きりのものではなく、くり返し行われるものであったようです。けがれを落とすという、「みそぎ」に近いものと言ったらよいでしょうか。そしてその時に重要視されることは、「本人の心構え、本人の頑張り」です。その人自身が「新しくされる」ということとは違います。

[2] 主イエスのバプテスマー「聖霊と火」によるもの

さて、バプテスマのヨハネは、旧約と新約とつなぐ預言者であり、力みなぎる説教家だったようですが、非常に謙遜でした。自分は、メシアが現われれば消えていく存在、その靴の紐を解く値打ちもない者であることを自覚していました。ヨハネは、自分が授けるバプテスマは「水」によるバプテスマだが、私の後に来る者は、「聖霊と火」によるバプテスマを授けることが出来る者だ、と公言しています。「水」の洗礼も、単に汚れを落とすという意味合いだけでなく、イスラエル民族があの出エジプトの際、紅海の海の水を通して自由になったということと重ね合わせて理解していたという重要な意味もあったようですが、いずれにせよ、バプテスマのヨハネは、周りの民衆が「この人がメシアかもしれない」と思っていた、そんな風潮をも感じながら、「私は水でバプテスマを授けるただの人間だ。しかしまことのメシアは“聖霊と火”によってあなたがたにバプテスマを授けるのだ」と語りました。

「聖霊と火」——それは、一つには「さばき」を物語るものです。17 節にあるように、「手に箕(み)を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる」と、容赦のない神様のわざが語られています。しかし、麦そのものは残される(救われる)訳です。焼き払われるのは、外側の殻のみ。これは、私たちを裸にし、外側の罪の衣を滅ぼし、命を御手の中に受け取って下さるということではないでしょうか。厳粛な中にも、大きな慰めを感じる言葉だと思います。

そして「聖霊と火」、それは、人間の力ではなく、聖霊なる神様ご自身が私たちに直接関与されるということであり、それは又、火が持つさばきの側面と、火の暖かさ、明るさ、つまり愛によって私たちを新しくして下さる、ということだと思います。今や、新しい時代がやってきたのです。それは、神ご自身が、罪人である私たち人間の中にやってきて、しかも、私たちを滅ぼすためではなく、その逆です、私たちを愛し、神様の命に生きることが出来るために、イエス様は「まことの人」となって下さったのです。

「まことの人」となって下さいました故に、主は、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けられました。罪の全くないお方が、罪人のひとりと数えられるために、「水の洗

礼」「悔い改めの洗礼」をお受けになったのです。私たちと真に一体となるためです。それは、神様の御心に適ったこと、ご計画でした。ですから、主がバプテスマを受けられ、祈っておられると、天から声があったと記されています。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と。その時、「天が開け」たのです。天と地が口づけした。神様と人間が、主イエス様によって繋がられたのです。

[3] 「死んで」、復活の命に「生きる」こと

私たちが今日（こんにち）受けるバプテスマとは、この主イエス様のバプテスマに与るものです。私は、ウィリアム・ウィルモンという牧師・神学者が書かれた、『洗礼—新しいいのちへ—』（教団出版局）という本をとっても感動をもって読んだのですが、その中にこのような文章がありました。—「神の霊は、主イエスにとどまっています。…主イエスの洗礼は、人間が備え、人間が悔い改め、人間が清める、人間の儀式ではありません。なぜなら、もう備えをする必要はないからです。神の国はここに、「あなた方の間に」（ルカ 17：21）イエスにおいて現臨しています。主イエスの洗礼は、ヨハネによるものではなく、聖霊によるものなのです」。

そして、洗礼、バプテスマというのは、主イエスによる救いの出来事を、自分の身をもって体験する、ということです。それは、十字架と復活の出来事が、私の中でも起こるということの意味をしています。一言で言えば、「自分に死んで、神様の命に生き始める」ということです。

そもそも「バプテスマ」というギリシア語は、「洗う」ということではなく、「浸し沈める」という意味を持っています。「洗う」というのは表面的で終わってしまいますし、何度でも洗い直さねばなりません。が、「沈める」こと、つまり古い自分に「死ぬ」ことは、一度でよいのです。そして水から上がってくる時、その人は、もう神様の命の中に新しく生き始めているのです。イエス様が復活されたように、その神様の命に、私たちも与るのです。これは神様の霊の奇跡ですね。そしてバプテスマというのは、自分で自分に授けられません。「ただ受けるだけ」なのです。「努力・頑張り」ではありません。それは丁度、「ただ恵みによって救われる」ということと同じことです。

先ほどのウィルモンは、バプテスマ・洗礼の本質についてこうも言っています。——「洗礼を受けるとは、死を宣告されることです。洗礼は人生の最後の日のためのリハーサルであるとともに、神が望んでおられる姿になっていくことを妨げようとする全てのものに対して、日ごとに私たちが死ぬための予行演習のようなものです。そして同時に、洗礼とは、復活の練習でもあります。私たちは、洗礼における死と、生涯最後の日に訪れる死との間にあって、洗礼の水から呼び起こして下さった神が、母の胎から生まれ出る新生児のように、私たちを再び墓から呼び起こして下さるという希望に生きます。私たちは、洗礼から来る確信に生きます。私たちは死と復活の道の試運転を既に済ませているからです。私たちは死を恐れません。」と。

[結] 信仰とは、大胆な生き方

この後で一緒に賛美したい讃美歌は、515番「静けき川の岸辺に」です。「心安し。神によりて安し」という折り返しがある歌で、この歌を好きだという方は多いのではないかと思います。私はこの中の3節が、特に心に響きます。

「嬉しや 十字架の上に わが罪は死にき 救いの道歩む身は ますらおのごとくに」となっています。この歌詞との関わりで、今日「招きの聖句」として読んで頂いたガラテヤの信徒への手紙2:19~20を思い起こします。使徒パウロの信仰告白です。

—「わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」

何と言う大胆なパウロの言葉でしょうか！ 私は週報の巻頭言にも、今日のこの後で執り行う「主の晩餐式」について書かせて頂きましたけれども、主の晩餐とは、イエス様がご自分の命を捨てられるという覚悟の食卓であり、それは、ただ死ぬということではなく、そのキリストの命を、私たちが受ける、すなわちその命に生きるということに他ならないのであって、「命のやりとり」がそこで起こることだと思ふのです。ある意味、神秘的なことだと言っても良いと思います。そのことが聖霊によって起こっている、と。だからパウロははばからずに、いえ、喜びながら語ったのだと思います。「キリストがわたしの内に生きている」と。何故なら、あの十字架の上で、私の罪もすべて、キリストが負って下さって、自分はもう自分の罪や罪深さに捕らわれなくても良い存在に変えて頂いたのだ、と神様を賛美しているのです。

「嬉しや 十字架の上に わが罪は死にき 救いの道歩む身は ますらおの如くに」(515番3節) —「ますらお」と言うのは、勇士ですよ。大胆な、勇敢な存在として生きるということです。イエス様をお迎えする、というのは、大胆な生き方なのです。この世的に見れば、おばかさん、愚か者なのかもしれません。でも、嬉しいのです。それで心に平和が与えられ、満たされているからです。聖霊のお働きとしか言えない現実が、私たちの中に起こっています。何と感謝なことでしょうか！

この、私たちをしっかりと捕えて離さないお方に、私たちも離れずに繋がって、そしてお委ねしながら、この新しい年の信仰生活をご一緒に歩ませて頂きたいと思います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたの御名を讃えます。
新年最初の主の日の礼拝を、こうして愛する皆様とご一緒に捧げることが出来て、

心より感謝致します。バプテスマのヨハネは、「わたしではない、この人だ」と、主イエスを指差し、私たちが誰と結びつくべきかを示して下さいました。

そして今私たちは、聖霊の導きと恵みの中で、十字架と復活の主イエス様と、バプテスマの事実をとおして、繋げられていることを心より感謝申し上げます。

「あなたは私の愛する子」。これは、私たちにも語りかけられている神様からの言葉であることを信じます。

どうか、この一年も、あなたに愛されている者として、深い信頼をもって、あなたに従っていく者とならせて下さい。

川越キリスト教会の毎週の礼拝をどうぞ祝福してください。私たちになお一層の恵みを注いで下さい。特に体の弱さを覚えていらっしゃるお一人ひとり、あなたが共にいて下さいますように。ますます、とりなし祈る群れとして下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。